

統計

JA 新潟県厚生連長岡中央総合病院病理部の業務統計報告
—厚生連病理センター設立後40年の歩み—

長岡中央総合病院, 病理部: 病理医

五十嵐俊彦

戦前においては、病理学の目的は大学における解剖例を通してみた疾患の解明にあった。ところが敗戦後、アメリカの医学が導入され、病理学は解剖例のみならず生検材料を取り扱うようになり、臨床病理検討会 (clinicopathological conference, CPC) なども行われて、臨床とのかかわりが従来よりも一層緊密になった。しかし終戦直後の生検材料は、大学付属病院のものとは勿論のこと、学外のものも大学に送付され、病理学教室で処理されていた。ところが1955年(昭和30年、58年前)頃から学外の一般病院においても独自に生検材料を処理したいとの要望があり、各病院で組織標本を作製する施設が設けられた。新潟県でも病理センターをはじめ長岡日赤、高田県立中央病院などでは、専門の病理学者がこれらの病院に赴任して生検材料や解剖例の処理をするようになった。

新潟県厚生連においては、当初は病理学教室員が長岡中央総合病院に非常勤に出勤して標本をみていたが、常勤業務体制として新潟県厚生農業協同組合連合会病理センターを昭和46年4月(1971年、42年前)に開設し、更に、昭和56年3月(1981年、32年前)に衛生検査所として対応することとなった。施設理念は、「病院の医療機能の向上並びに診療支援として、現代医療において病理検査は欠くことのできない重要な部門であり、系統病院をはじめ広く医療機関からの機能負託に応え、以って地域医療に貢献することを理念とする。」と明記されている。初代小島國次所長(1971-89)、二代石崎敬所長(1990-7)、三代不肖筆者(1998-)が責任を任されてきた。開設後10年の節目に、初代小島先生が「新潟県厚生連病理センター 十年の歩み」を刊行され、発足よりの10年間の業務・業績を公表された(1)。当時(1981年10月6日)の新聞紹介記事において、臨床における病理検査の意義が述べられている(写真1)。更に、開設30年目において、本誌2004年版に業務統計を再報告した(2)。当施設は2004年に中越地震に見舞われ、全ての検体標本が破損し廃棄せざるをえなかった(写真2)。当施設は2005年10月に長岡中央総合病院に移管され、開設40年(移管後病理部開設8年目)の節目を迎えた。本稿において従来報告内容に最近の統計を加えて報告した(表1)。

年間細胞診・組織診検体数の年度別変化において、年間検体検査数は増加傾向が認められる(図1)。当施設を取り巻く医療環境は80年代(昭和)までは量的拡大の時代で取り扱い検体数も増加した。90年代(平成)以降は医療費抑制の時代にもかかわらず取り扱い検体数は増加した。直近8年間は系統2病院の検体を大学病理学教室に委託した為に増加が停止した。

年間取り扱い剖検数の年度別変化において、顕著な減少が認められ、現在の剖検数はピーク時の2又は3割となった(図2)。この減少傾向は全国的なもので、その原因は生前診断の進歩、承諾の煩雑さ、訴訟誘発、コスト等によると考えられる。

術中迅速診断件数は増加傾向であった(図3)。縮小手術の増加が原因と考えられる。

病理標本材料を使った遺伝子検査を導入して13年目を向えた。直近の取り扱い検体数の増加の原因は、ヒト乳頭腫ウイルス検査の増加である(図4)。

文 献

1. 小島國次. 病理センターの発足. 新潟県厚生連病理センター十年の歩み. 小島國次編. 新潟県厚生連病理センター出版, 長岡市, 1981(昭和56年); 1-2頁.
2. 五十嵐俊彦. 統計 新潟県厚生連病理センター設立後30年の歩み. 厚生連医誌 2004; 13: 105-9.
3. JA 新潟県厚生連長岡中央総合病院病理部ホームページ、アドレス: <http://www.nkp-center.jp/>

英 文 抄 録

Statistic review

Pathological statistic report during 40 years after the establishment of Pathology Center

Nagaoka Central General Hospital, Pathology Center; Pathologist
Toshihiko Ikarashi

Pathology Center of JA Niigata Prefectural Welfare Association had been established on April in 1971 (Showa 46th year), at 42 years ago, and it was registered as hygiene laboratory institute on March in 1981. The purpose of our institute was to improve and assist the modern medical function of associated hospitals contributing local medical cares. This institute was firstly managed by Kuniji Kojima, secondly by Takashi Ishizaki, and thirdly by the author. At a turning point of 10 years after an establishment, Kojima firstly published the commemorative book, named as "Achievements for ten years after the establishment of Pathology Center". After 30 years, we, further-

more, reported our statistic analysis in this journal in 2004. In this report our recent practices were disclosed.

ment of pathology, Pathology Center of Niigata Prefectural Welfare Association, statistic report, cytology, histopathology, autopsy, telepathology, image transmission, genetic examination

Key Words : Nagaoka Central General Hospital, Depart-

表 1. 業務検体数の年度別変遷

西暦	年号	細胞診				迅速	組織診	剖検	テレパ ソロジー	遺伝子 検査	期間設立後年数 (移管後年数)
		総数	外来	検診							
				子宮	肺						
1971年	昭和46年	1497	1497				3321	23			病理センター 1(年度4/1~3/31)
1972年	47年	2571	2571				4030	49			2
1973年	48年	3028	2678	350			3919	50			3
1974年	49年	3445	3184	261			4237	60			4
1975年	50年	3818	3585	233			4750	65			5
1976年	51年	4301	3517	784			5281	52			6
1977年	52年	4142	3092	1050			5284	52			7
1978年	53年	6092	3855	2237			5550	75			8
1979年	54年	6797	4213	2584			6211	66			9
1980年	55年	7944	4779	3165			6465	64			10
1981年	56年	8848	5578	3270			7400	62			11
1982年	57年	11825	5980	5845			9030	62			12
1983年	58年	13542	7156	6379	7		9950	89			13
1984年	59年	14347	7903	6351	93		10371	92			14
1985年	60年	15694	8532	6015	1147		11828	80			15
1986年	61年	17773	9929	6037	1807		13828	64			16
1987年	62年	20152	11581	6865	1706		13968	64			17
1988年	63年	19853	11002	7463	1388		13964	66			18
1989年	平成1(64)年	20629	11195	7809	1625		13643	46			19
1990年	2年	21287	11884	7894	1509	92	15253	55			20
1991年	3年	24830	14020	9409	1401	100	16698	48			21
1992年	4年	26403	15335	9714	1354	131	18170	46			22
1993年	5年	27392	15717	10331	1344	96	19600	62			23
1994年	6年	27097	15732	10114	1251	98	17357	44			24
1995年	7年	26762	14671	10296	1795	85	17682	29			25
1996年	8年	28318	16161	10384	1773	106	17960	55			26
1997年	9年	29521	17176	10688	1657	109	17959	52			27
1998年	10年	29014	15510	11845	1659	113	18433	53			28
1999年	11年	30392	15586	12963	1842	189	18544	39			29
2000年	12年	31136	16967	12273	1896	238	19684	53			30(年度1/1~12/31)
2001年	13年	32360	17350	13077	1933	241	20000	41			31
2002年	14年	32716	17228	13549	1939	248	20225	74	118	262	32
2003年	15年	32663	16504	13736	2423	208	20570	42	106	353	33
2004年	16年	32440	16334	13667	2439	209	20077	25	71	312	34
2005年	17年	30250	16304	11546	2400	208	19623	39	88	223	35(10/01中央病院移管1)
2006年	18年	30469	16533	11501	2435	137	21554	23	47	279	36(2)
2007年	19年	30362	16720	11218	2424	227	22044	27	78	318	37(3)
2008年	20年	31688	17077	12203	2408	245	20576	20	80	374	38(4)
2009年	21年	30311	15594	12439	2278	243	18886	11	57	359	39(5)
2010年	22年	31422	16494	12750	2178	242	17652	14	59	351	40(6)
2011年	23年	31252	17325	12210	1717	267	17467	15	64	349	41(7)
2012年	24年	30513	16975	11944	1594	253	17324	12	75	577	42(8)

注意 2000(H12)年度より年度開始を1月1日、年度終了を12月31日と変更。それ以前は、年度開始を4月1日、年度終了を翌年の3月31日としてある。

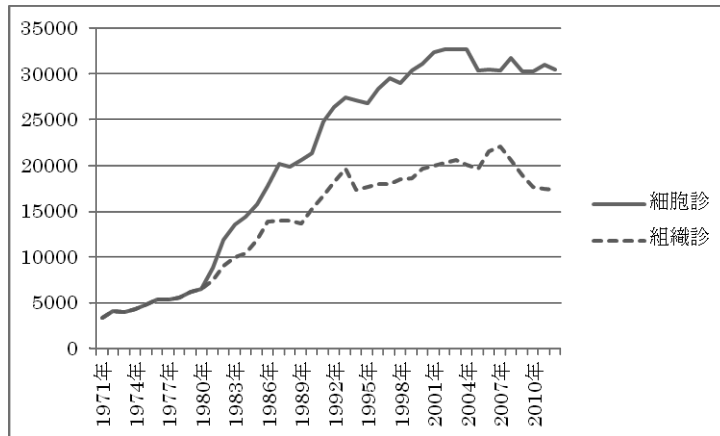


図1. 年間細胞診・組織診検体数の年度別変化

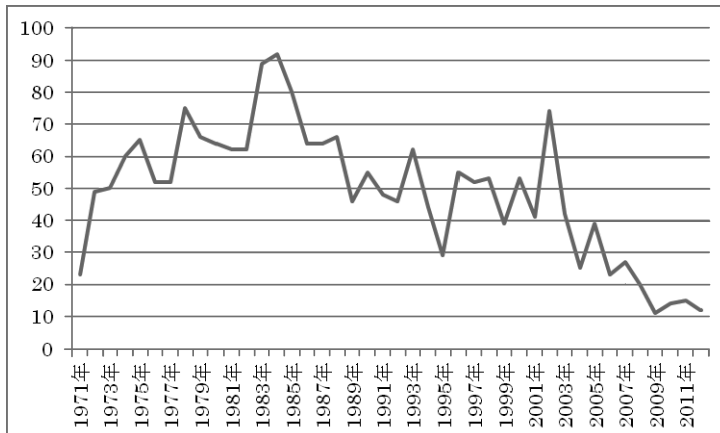


図2. 年間剖検数の年度別変化

上図：当施設、下図：日本病理学会剖検輯報データベースに基づいた全国登録施設の届出解剖総数。

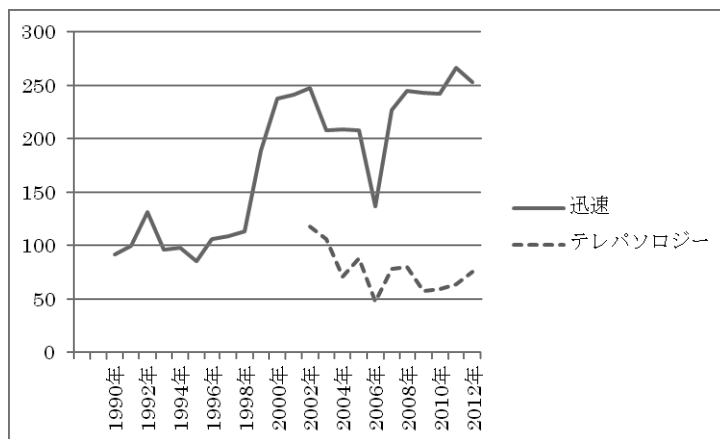


図3. 迅速検体数の年度別変化
 迅速総検体数＝3病院合計検体数（長岡中央病院＋村上病院＋柏崎医療センター）
 テレパソロジー＝2病院合計検体数（村上病院＋柏崎医療センター）
 年間迅速検体数は250件で定常状態となっている。

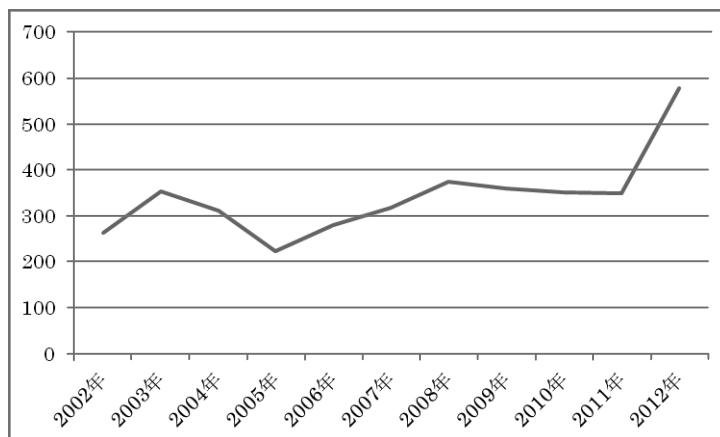


図4. 遺伝子検査数の年度別変化

病因解明に大きく貢献

創立10年の県厚生連病理センター

検査件数が年々増え業績を上げている県厚生連病理センター



臨床医の適切な診断・治療に不可欠な病理検査は、乱診乱察を防ぐ方法として注目されているが、系統病院の病理検査をいち早く組織的に手がけてきた県厚生連病理センター（長岡市川崎一、小増次所）は創立以来十年経過した。この間に扱った組織検体四万九千件、ガンなど細胞診は三万三千件、病理解剖五百六十体に達しており、地道ながらも臨床医の適切な処置に大きく貢献、さらに医学界の先端をゆく研究も発表されるなど、他県に先駆けこのセンター方式を開業者に期待されている。

病理検査は、患者の組織細胞などの役割の域を越えたが、戦後重視されたため、

を調べ、病変の本質を解き明かす後になって臨床所見を裏打ちする

す基礎医学の分野。戦前の病理学、病理検査が科学的診断を下すための

は専ら院内の医学者の場として適切な診断・治療を施すために

重視されたため、県厚生連の病理センターが発足したのは四十六年四月で、当時専門の病理学者を置いていたのは新大付病院とごくわずか。病院単独で病理検査機関を持つことは病理学専攻の不足、検査量の少なさもあり、多くは東大の専門医に週一〜二回出張してもらって処理していたが、県厚生連は県下の厚生連病院の病理検査業務を同センターで担当することでスタートさせた。他県にない新しい試み。

この十年間に扱った検査件数をみると、人体の組織標本検査は三つと四万九千件、スタート年度三千三百件しかなかったのが昨年度は約二倍の六千五百件に増え、顕微鏡検査も増えている。

ガン発見に威力を発揮する細胞診も当初千五百件から昨年度千八百件と三倍強に増え、十年間、計三万三千件、また臨床検体として、判決とらなり、病理医にも勉強の機会となる病理解剖は当初二十余例から最近は七十例近くに増え、これまで五百六十体を前年検した。病変の本質を究めるため

組織検査 5 万件近く

研究分野でも業績あげる

の解剖は、遺伝とらのトラブルが付随するもの、胃腸に増えていることは顕微鏡検査でレリーキをかける面から注目される。

また持ち込まれる検査業務の傍ら、コソコソ進められた研究分野でも業績を上げていく。代表的なものは四十七年秋に発見されたスライズ組織内のアルコール腫瘍体、これはアルコール腫瘍の新たな発生動物で従来は肝臓内のみしか発見報告はなかったが、スイス研究医の小島所長によって確認され、当初国内では抵抗されていたものの先に外国学界で認知され、昨年はフランスの権威アリ・サール教授の著書に同所長の研究論文引用した。

検体を持ち込む医療機関は、八割が系統内の厚生連十一病院だが、ほかに十日町、六日町、松代の県立三病院、新潟県立病院、佐渡総合病院をはじめ、中越地方を中心とする診療所、医院が三十余ある。現在の職員数は当初の三人から十一人に増え、持ち込まれる検体は朝日に結果を知らかにすことともに、手術中に向いて迅速組織を調べる迅速標本診断にも応じている。

小島所長の話、いつの間にか十年経ったが、私としては利用がまだ少ないと思う。保険点数も改善されたし、特に開業医間がもっと活用すべきだ。

写真1. 病理センター開設10年目の新聞紹介記事 (1981.10.6付)



写真2. 病理センター鏡検室、中越地震被災当日深夜、2004年：ガラス標本マッペ棚・本棚が破損した。



写真3. 施設職員集合写真、病理センター玄関脇、長岡中央病院移管前、2005年

(2013/01/22受付)